

中国隋唐時代の俑に関する総合的研究
Synthetic Studies on Tomb Figurines
in the Sui and Tang Dynasties

小林 仁 (KOBAYASHI HITOSHI)

財団法人大阪市博物館協会・大阪市立東洋陶磁美術館学芸課・主任学芸員



研究の概要

広範な地域で豊富な出土例のある隋唐時代の俑について、紀年墓出土資料の詳細な観察を基にした体系的かつ総合的な美術史的研究により、各時代・各地域の俑の特徴を把握しながら、様式変遷と地域性、そして制作技法や工房生産など多角的な視点から、隋唐時代の俑の成立と展開について明らかにすることを目的とする

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学／美学・美術史

キーワード：美術史・俑・隋・唐・陶磁史

1. 研究開始当初の背景

墓に副葬される明器である俑は、中国美術史において重要な研究テーマの一つである。出土資料の豊富な隋唐時代の俑について、体系的かつ総合的な美術史的研究はこれまでほとんどなく、研究代表者がこれまで実施してきた南北朝時代の俑に関する調査、研究成果を踏まえ、国内外で活躍する研究協力者と連携を図りながら、隋唐時代の俑について、出土資料の調査を基礎とした体系的かつ総合的な研究を実施したいと考えるに至った。

2. 研究の目的

紀年墓を中心とした隋唐時代の俑の出土資料の詳細な調査を実施することにより、各時代・各地域の俑の特徴を把握しながら、様式変遷と地域性、そして制作技法や工房生産など多角的な視点から、隋唐時代の俑の成立と展開について明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は、1) 中国各地での現地調査による出土資料に即した実証的研究、2) 陶磁史や考古学など多角的な視点からの総合的研究、3) 中国各地の研究者との学術交流と協力関係、などの実績と経験を基礎に、従来ほとんど試みられなかった美術史的観点から、隋唐時代の俑の様式変遷と地域性の解明に主眼を置く点に最大の特色がある。また、専

門である陶磁史の立場から、俑の制作技法や生産工房の問題まで扱う点も本研究の特色といえる。さらに、実証的な美術史研究にとって必要不可欠な作品調査の際には、造形特質や制作技法の一層の理解のため、完形品のみならず陶片(破片)類も調査対象とし、従来あまり注目されることのなかった彫塑美術としての俑の新たな側面に焦点を当てるなど、美術史研究の一ジャンルとしての俑研究の新たな可能性を示していきたい。

4. これまでの成果

中国現地調査とテーマ研究を相互に関連させながら研究を実施してきた。以下地域ごとに、主要な成果についてまとめる。

(1) 西安地区

陝西省考古研究院では長安区出土隋唐墓群の出土資料を特別に調査した。とくに隋時代の紀年墓資料は隋俑の編年、分期研究にとって重要な意義をもつものであり、報告書の公表が待たれる。また、個人所蔵の西安唐醴泉坊窯址及び平康坊窯址出土の唐俑陶範を調査することができた。陶範の出土例はわずかで、俑の製作技術を理解する上でこれらの資料的価値は極めて大きい。さらに今回は特別にその陶範を使つての成形実験を行うことができ、陶範成形がかなりの精度で製品が成形できうるものであるとともに成形には想像以上に熟練の技が必要であることが理解でき、陶範は単なる大量生産用の安易な手段ではないという側面もうかがうことができた。

(2) 山西地区

長治市博物館では長治地区出土の唐代陶俑の調査を行い、長治を中心とした山西東南部は独自の陶俑の様式が見られることが改めて確認できた。また、山西省襄垣県では近年出土の隋唐俑を特別に調査することができ、一部「瓷質」と報告されている俑が邢窯産である可能性が高いことが分かり、邢窯産の唐代の俑の流通の問題を考える上で新知見が得られた。

(3) 河北地区

河北省の永年県では紀年墓である孫信墓出土の唐俑などを特別に調査することができた。河北地区の唐俑はこうした紀年墓資料によれば、ほぼ7世紀代の初唐期に集中していることが確認できた。研究代表者はこうした河北地区の陶俑が邢窯産であると考えた。その後、河北邢台では邢窯で近年出土した陶俑及び仏教陶塑像類の大量の一括資料を実見することができ、邢窯が河北地区の陶俑の一大生産地であることが実際に確認できたことは大きな収穫であった。白磁で有名な邢窯だが、とくに初唐期においてこうした陶俑をはじめとした多彩な陶製品が大量に生産されていたと考えられ、これは邢窯の全体像を考える上で画期的な成果といえる。

(4) 湖南、湖北地区

湖南省では岳州窯(湘陰窯)の隋唐時代の俑及びその生産状況について調査を行い、とくに青瓷俑は湖南地区内のみならず、近隣の湖北地区や四川地区などにも流通していた状況が確認できた、湖北隋墓出土の俑も岳州窯産である可能性が高いことが分かった。また、湖北省襄樊市では近年唐墓と報告された墓葬出土の陶俑が南朝墓のものであることを明らかにするとともに、新たな唐俑の資料を実見することができ、南北境界地域にある襄樊の南朝から隋唐にいたる陶俑の変遷と地域的特殊性を考える上で大きな収穫となった。

(5) 湖北、江西地区

江西省博物館において未報告の唐三彩俑の資料が確認できたことは唐三彩俑の分布と流通を考える上で重要な発見となった。江西省において洪州窯窯址ならびに出土資料を調査し、洪州窯産青磁の実体について理解を深めた。それにより、湖北地区の調査で実見した青磁明器類の一部がこの洪州窯産である可能性が高いことが分かり、俑をはじめとした明器類の流通やそれと関連する明器文化、あるいは葬送文化の地域性の解明に新たな手がかりが得られた。

(6) 河南地区

河南省では中国古陶磁学会主催の「中国早期白瓷、白釉彩瓷専門学術研討会」に参加し、早期白磁の年代の問題や隋時代の白磁俑に関する研究成果の発表を行った。北魏とされた鞏義白河窯窯址出土の白磁の年代に疑義を呈するとともに、隋時代の安陽張盛墓の白

磁俑の産地について邢窯の可能性を指摘したことは多くの注目を集めた。

5. 今後の計画

平成22年度及びそれ以降についても、これまで同様、中国現地調査とテーマ研究を中心に研究を展開していく予定である。具体的には山東、江蘇地区、西安、甘肅地区などにおける調査と成果公表のための補足・追加調査も適宜実施したい。そうした調査を踏まえながら、各地域の隋唐時代の俑の種類・組合せ、様式変遷、生産工房などについてのテーマ研究を並行して実施する。それぞれのテーマについては、学会や研究会、さらには公開レクチャーなどでその成果を公表するとともに、論文として日本中国考古学会、東洋陶磁学会、中国古陶磁学会の会誌などに順次投稿していく予定である。

6. これまでの発表論文等

【論文】

小林仁、「白瓷的誕生—北朝瓷器生産的諸問題與安陽張盛墓出土白瓷俑【中国語】」、小林仁、中国古陶磁学会編『中国古陶磁研究(第15輯)』紫禁城出版社、61-78頁、2009年

【口頭発表】

小林仁、「唐代青瓷俑考—長江中流域の隋唐時代の俑に関する諸問題—」、東洋陶磁学会研究例会、2010年2月13日、大阪市立東洋陶磁美術館

小林仁、「初唐期の俑の特質について—陝西・河南地区を中心に—」日本中国考古学会2009年度大会、2009年11月22日、筑波大学

小林仁、「白瓷的誕生—北朝瓷器生産的諸問題與安陽張盛墓出土白瓷俑【中国語】」、中国古陶磁学会“中国早期白瓷、白釉彩瓷専門学術研討会”、2009年10月22日、河南省鄭州

小林仁、「中国唐時代の俑の制作技法について—陶範成形を中心に—」、民族藝術学会第112回研究例会、2008年11月1日、国立民族学博物館

小林仁、「山西省の唐時代の俑について」、東洋陶磁学会研究例会、2008年6月28日、大阪市立東洋陶磁美術館

【招待講演】

小林仁、「中国の陶俑—その魅力と謎」、出光美術館第264回水曜講演会、2009年8月26日、出光美術館